

## 復興支援フォーラムニュース No.37

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html> )

<事務連絡先 今野順夫([tkonno67@gmail.com](mailto:tkonno67@gmail.com)) 中井勝己(024-548-8313)>

第34回ふくしま復興支援フォーラム (2013年3月22日) <「放射線被曝とその影響について」/齋藤紀氏>で、寄せられたご意見等。

★紀先生のプレゼンが、内容、PPT、発声、進行の全てが分かりやすかった。(S.S)

★リスクコミュニケーションの大切さ、リスクコントロールの重要性を認識し、それを具体的に設計していくためのたくさんのヒントをいただきました。問題に、いかなる姿勢で向き合っていけばいいのかについて、論理的に明快に積み上げていく方法論を学ぶことができました。先生の科学に対する見方、伝え方に共感し、勇気づけられました。(Y.N)

★ありがとうございました。根拠の提示をしながら、ふくしま県人の健康づくりのために、何が大切かを示して下さいました。生活の中で、健康を支えるもの(要点に)にもっと心していかなければならないと思いました。/今後、更に放射線について、学んでいかなければならないと思っています。(S.E)

★年間 20 ミリシーベルトの避難指示を出されて、リスクの高い生活を全村民(被害)は押し付けられています。しかし、原発事故より指示される日までに、山下俊一氏達(同じ考え方をする方々)は、年間 100~200 ミリシーベルトでも、身体に直ちに影響あるものではないとし、避難することのリスクが大きいので避難しなくて良いとか、レントゲン・CT・タバコ・自然等での被曝と比較させ、多くの村民に話し、懇談し、自分達の放射能に対する考え方が正しいとしたのです。本来の科学者、医者などは、十分な英知をつくして理解される情報開示すべきであったと私は怒っている。国は年間 20 ミリシーベルト以下なら良いとし、加害者としての責任逃れをしている。巨大な原子カムラに結集する方々には、私達、福島被害など、私達が考える程、責任も、放射性物質飛散した犯罪も過去のものにしようとしている。私達に何か非があるのですか。「安心」「安全」の基準値はどこにあるのですか。(H.S)

★長年にわたる齋藤先生の苦悩の過程と現時点の結論が良くわかりました。しかし、全体としてか、多面的に悩めるプロセスは、これからなのかも知れません。ご健闘、祈ります。(S.M)

★安心は、各人の基準によって変化するもので、安全の基準が定まらない限りは不安が続いている。検証を踏まえた注意深い対応は欠かせないものの、総合的視点で判断することが重要であることを改めて感じました。(T.I)

★医学的、科学的な説明はわかりやすく、通説の真偽や、見方の参考になりました。(Y. I)

★ありがとうございました。スッキリしましたが、又、別な課題が……。県民健康管理の基本調査の回収率の低さをほっておいて、安全安心に移っていいのでしょうか？賠償の問題や子ども被災者支援法(自主的避難者)の区域の問題もある。さて、今後の争点は、どこに移っていくのか？(K. I)

★甲状腺ガンについての不安が高まっています。講演の中で、韓国では、エコー検査で乳がんと一緒に甲状腺ガンについても調べていたとの話がありました。こういうことを福島でも是非やって欲しいと思います。県立医大に高額な検査機器が導入されるのですから、徹底した健康診断を実施することが何よりも重要でないでしょうか。その結果、ガンが見つかったとしても、それは治療につながって、不安を乗り越える1つの方法になるのではないかと思います。(K. S)

★一般人で、医学のことは全く分かりませんが……。今日の講演で「リスク」というモノについての表と裏を知ることができて良かったと思います。(Y. M)

★科学者・医学者の良心をかけた、実にバランスのとれた報告で感銘を受けた。低線量被曝論を過剰(過大)に意識した報告といえるかもしれない。質疑応答も説得力があった。(S. I)

★「100ミリシーベルト以下を、どう考えたらよいか」が私の知りたい事でした。しきい値の有無、リスクの程度で、斎藤先生の表現の仕方に興味がありました。そこは不確定であり、安全とは言えないし、リスクは0とは言えないのですね。100ミリで不確定なら、「年間1ミリ」の現状にすることを求めて不安を抱き続けることは、意義はないと思います。考察が重要なだとわかり、データをどの様に見ていくか、検診すれば見つかる、数字も上がることには納得。言われてみれば、その通りだと気づいて、良かったです。(正直な気持ちです。)これからも正しく学びながら、廃炉を求めていきましょう！ありがとうございました。もう少し、スクリーンを高くしていただけると、ありがたいのですが。すみません。(S. K)

★勉強になりました。(K)

★いよいよ、リスクとどう向き合うか！そのための仕組みを、国や県、市町村は準備しているのだろうか！その議論が重要であろう。(H. S)

★放射能の理解をめぐって、自主避難する人としらない人が、対立的な状況におかれているなど悲しい現実があります。自分も含めて、住民側でも、もっともっと放射能の健康への影響について、どう考えるのか、現在の研究の到達点も含めて、学ぶ必要があると思いました。三春町がヨ一素を飲ませる決断を実行したことについて、どう考えられるか、質問して見たかったです。→最後の質問に同じような質問がありました。(Y. A)

★健康への思いは、人それぞれで、なかなか難しい問題と改めて感じました。(S. Y)

★ていねいな講演をありがとうございました。(M.S)

★低線量被曝での影響は「不確定」であり、冷静に観察し続けることが必要であることが、よくわかりました。子どもはもちろん県民の定期的な健診の保障が、必要であることを強く思いました。(K.S)

★ありがとうございました。放射線については、とても難しいですが、最後におっしゃられたように、一般市民としては、社会的対応が急務であると思いますが、福島の行政には怒りを感じています。(N.A)

★バイアスコントロールを取り入れたかたちの研究が行われる必要があるし、継続調査による知見の蓄積が必要(線量による健康リスクを、今よりも科学的に評価できるように。後世で生かされる。)。 (N.N)

★放射線被曝による人体への影響に対する受けとめ方について、改めて考え直す機会となりました。(K.F)

★チェルノブイリ事故後に採られた正確なデータがほぼ無い中で出された論文等と比較し語るフクシマ問題には、恒常的に起きてしまう市民の混乱。誰が訂正するのだろうか？福島原発事故に対する科学的サポートが無い中で、行政は、安全側に立ち、避難等の行動を起こしたわけであり、その事も県民を混乱させている現在、県民一人一人の対応を、一度まとめるため、正確で統一されたメッセージを科学者は自主的に発信する義務があるはずだ。市民は聞き出す努力と継続力が要と考えます。(T.S)

★多くの資料を示して下さった講演ですが、残念だったのは、斎藤先生ご自身の作図に、原典が示されていないものがあって、確認できなかったことです。この資料では、危険だと過敏に反応している人達は納得しないのかなと思いました。(K.Y)

★かなり冷静な分析に感銘しました。今後、さらに調査をしつつ、世界の英知を集めていく努力が必要と感じました。多少に関わらず被曝した福島県民、福島県に住み続けるためには、福島県を最も健康への配慮に行き届いた県にすべきだと思います。除染の努力は継続しつつも、医療体制の整備のみならず、環境、健康づくり、労働、あらゆる場面で健康が貫かれる県でありたいですね。心身とも健康な地域社会をつくって行けるか、原発事故に対抗する最終的な目標と思えました。(T.K)

**【3.22会場カンパ／4500円：ありがとうございました。】**

放射能影響予測システム SPEEDI とは？ なぜ機能しなかったのか？  
あり得る次の事故で有効活用するには何が必要か？

佐藤 康雄

福島第一原発事故によって、大気・海洋中に大量の放射性物質が放出された。3月15日夕～夜にかけて、浜通り住民の避難所もあった浪江町津島、赤宇木、飯舘村長泥等の住民はどこからの情報提供もなく高濃度の放射性物質にまみれた。このようなとき、情報提供することが期待されていた SPEEDI は、その役割をほとんど果たさなかった。この報告では、SPEEDI とは、どんなものであるのか？ どんな効用が期待されており、一方でどんな本質的限界があるのか？ 今回期待された役割を果たせなかったのはなぜか？ 一番問題だったと思われるのは、やはり「安全神話」に毒されて、国の行政システムがこのような過酷事故に対応したものになっていなかったことが大きいと思われる。あり得る次の原発事故で、SPEEDI を有効活用するには、何が必要か？ 最も大切な点は SPEEDI 計算結果を解釈して、避難住民、関連地域住民に情報伝達する行政上の責任機関の整備（防災指針、必要なら法律の改訂）が必要と考えられる。原子力規制委員会、原子力規制庁、文科省、国の災害対策本部、現地対策本部の役割分担を簡明に定めておく必要があると考える。科学・技術的には、緊急時航空機による面的モニタリングデータを用いて、原発からの放出率データを逆推定し、それを与えた SPEEDI 計算を行うシステム開発が必要である。

1. 全(地)球での気象(移流拡散)モデルによる太平洋域での放射性物質の鉛直合計量の挙動(60km×60km ごと; 2011/3/12-2011/4/30, 3時間毎, 40秒)
2. 東日本領域での気象(移流拡散)モデルによる放射性物質の挙動(4km×4km ごと; 2011/3/12-2011/3/22, 1時間毎, 30秒)
3. SPEEDI とはどんなものか? 運用上の問題。
4. 今回の事故でなぜ機能しなかったのか?
5. あり得る次の原発事故で、SPEEDI 情報を有効活用するには、国の行政機構として何が必要か? SPEEDI 計算の精度向上のためには、科学・技術的には何が必要か?
6. まとめ

## <報告者・佐藤康雄氏の略歴ご紹介>

1943年福島県生まれ。

1967年東京理科大学理学部物理学科卒業。

1974年東京大学大学院理学系研究科地球物理学専門課程気象学専攻博士課程  
修了(理学博士)。

米国ハワイ大学気象学教室研究員、日本学術振興会奨励研究員等を経て、  
1982年気象庁気象大学校講師。

1984年気象庁気象研究所予報研究部に転任、1993年より同応用気象研究部室長  
として「地球温暖化に伴う日本付近の気候変化予測の研究」に従事。

2003年同環境・応用気象研究部部長。2004年同気象研究所定年退職。

定年後の約5年間、JICA(国際協力機構)の技術協力プロジェクトの日本側リ  
ーダーとしてモンゴル気象庁に滞在。この間、中央大学大学院理工学研究  
科環境理工学副専攻兼任講師、茨城大学教育学部非常勤講師。

現在、中央大学大学院理工学研究科環境・生命副専攻兼任講師

著書『科学と人間シリーズ3 放射能拡散予測システム SPEEDI — なぜ活かさ  
れなかったのか』(東洋書店 2013年3月)、『技術と自然の未来を探る  
— ナノテクから宇宙まで』(共著、新日本出版社2004年)。

(上記著書の著者略歴から)

=====

### 【予告】

第36回ふくしま復興支援フォーラム」(2013年4月25日(木) 18時30分～)

テーマ 「中小企業の被害状況と復興に向けた課題～南相馬市原町区を中心に」

報告者 初澤敏生氏(福島大学教授)

会場 福島市アクティブシニアセンター「AOZ(アオウゼ)」 大活動室1  
(MAX ふくしま4F/福島市曾根田町1-18)

=====